

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



黒島出身の宮良哲行^{みやらてつゆき}さんは、島の中学校を卒業すると沖縄本島の高校へと進学した。その後、電気関係の専門学校へと進学する為、沖縄から東京へと移り住んだ。当時は、東京へ出るにもパスポートが必要な時代だった。

哲行さんが暮らした東京は、まさに高度経済成長期の真っ只中、東京オリンピック開催が決まり、開発と共に街の風景が変わっていく様子を肌で感じた時期だ。東京オリンピック開催後、電気関係の専門学校を卒業し、哲行さんは27歳で本土復帰後の黒島に戻った。

「帰ってくる時はパスポートはもう必要なかった。島にはまだテレビなどの電化製品は普及しておらず、水道の整備も帰ってきて少し経ってからだった」

哲行さんは庭のコンクリートの池を指して当時は雨水を溜めておくタンクだったのだと教えてくれた。

島に帰ってきた哲行さんは、黒島で電気関連の仕事に就きながら実家の民宿を手伝^{みちて}う生活を送っていた。旅人として民宿を訪れた道子^{みちこ}さんとの出会い結婚、5人の子もたちに恵まれた。

「黒島では、自給自足に近い暮らしができることが魅力です。若い頃から仕事が休みの日には海へ行き、冬にはアーサ、夏には魚や貝などを捕りに行きました。島には野草もあれば、実のつくものもあり、季節ごとにいろいろなものが採れます」

哲行さんにやってみたいことを聞いた。

「世界のいろいろな所に行ってみたい。それぞれの土地の行事や伝統文化を見てみたい。踊りとか音楽とかその場所に昔からあるもの。黒島の舟こぎとか行事とかの文化も東南アジアや中国から来ているのではないかなと思います。同じものが外から伝わって来ても島々によって民族的な歌や踊りは違います。それはその場所の暮らしがあるからその土地ならではのものになっていくんだと思います」

「僕は自由人ですから」と笑う哲行さんの笑顔を見たとき、日本が、沖縄が、凄まじい勢いで変わっていったときも、哲行さんの体内時計は、常に黒島の時間を刻んでいたのではないかなと思った。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右 QR コードホームページの Contact から。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー